

源氏物語の人物造型

——雲居雁と子どもたちを中心に——

中西紀子

一

源氏物語第一部で幼い恋物語の姫君であつた雲居雁は、第二部では子沢山家庭の北の方となり、第三部では失恋青年貴公子の母親となる。いずれも単発的なスポットの形でその変貌した姿を提示している。

第一部から三部へと変容する物語の中心主題から影響を受けながら、雲居雁はつねに一貫して母性の範疇で造型されていると考えられる。すでに、第一部少女巻での恋の発生と持続については、母性渴望に起因すると考察した(1)。本稿では、第二部夕霧巻における子どもたちの介在を軸として、雲居雁の母性のありかたを跡づけていきたい。

物語第二部世界を「作者は深い不安と苦悩と絶望をかかえこんでいるものとして、語り描いた。」(2)、その中で雲居雁と子どもたちのいる風景はいかにも明るく生氣にあふれている。この明るさは、中心主題にどのように機能しているのだろうか。

源氏物語に描かれる子ども時代の多くは、おとなへの猶予期間として存在している。将来の帝、后、または権勢家たるべきそれに適った姿として、子ども時代の容貌・才能・行動が描写される。光源氏、朱雀帝や明石姫君などの描かれ方がそれである。

これとは異なり、子どもが子どもであるという本来のあり方で描写される場合がある。雲居雁の子どもたちがそのひとつの例である。

有力な摂関貴族の子沢山は、将来の一族の繁栄を約束する。雲居雁が夕霧との間になした子は多く「さる時にあへる族類にて、いとやむごとなし。若君たちは七八人になりたまひぬ」(3)と、位階権勢に加え、美しい多くの子に恵まれて、世に望みうる至福の夕霧一家として条件づけられている。

本稿の人物の年齢は『源氏物語事典』所収の〔年立〕を用い、引用本文は『古典文学全集』に拠る。

落葉宮への恋慕によって引きおこされる、雲居雁と夕霧との家庭争議の場面①④⑥をつぎに示す。

場面① 乳児の夜泣きと授乳姿 〈横笛巻〉

場面② 手紙取りあげと一日半の家庭風景 〈夕霧巻〉

場面③ 子どもを文の使いにして歌の贈答 〈夕霧巻〉

場面④ 夫婦の会話も絶えて意思断絶 〈夕霧巻〉

場面⑤ 恋の成就目前で嫉妬をぶつける雲居 〈夕霧巻〉

場面⑥ 幼い子たち連れ里邸へ家族崩壊寸前 〈夕霧巻〉

王朝の貴顕の子どもは生まれるとすぐに専任の乳母が付けられる。裕福な貴族女性である雲居雁が、育児のために日々余裕もなく多忙に過ごさねばならないような状況は、夕霧郎ではありえないはずである。だが、雲居雁は横笛巻の場面①では、むずかる乳児をみずからあやしている。乳母や女房たちに、てきぱきと指示しながら具体的な育児にかかわっている。乳児との触れあって養育している雲居雁の姿は、いかにも意志的にみえる。貴族女性の行動の定石からはずれることを承知で、母性の自然を実行しているといえるのではないだろうか。

このような雲居雁に対して夕霧は、はやく若菜下巻の女楽の場面で、御簾ごしに父源氏の妻妾たちの優雅美麗な姿態に接して、心中つぶやいた。わが北の方は「子どものあつかひを暇なく次々したまえば、をかしきところもなく」

と、育児にかまけて風情をただよわせることもしない雲居雁に対して、否定的な評価を下している。

非日常空間として、女楽の宴の華やかさは、六条院世界の榮華を象徴するものである。夕霧の感動は、たしかに王朝の美的趣味性にかなう正当な価値認識である。その評価の眼で、日常的な家族を構成するわが北の方を引きあいに出せば、全面的に雲居雁は否定されざるをえない。

さすがに長年相思の夕霧は、雲居雁を酷評したすぐあとに、その評価を修復するかのように、雲居雁の魅力を心内で反芻する。夕霧にむかって腹を立てる時の、怒りを表現する姿がたまらなくかわいらしいと思う。「さすがに、腹あしくても妬みうちしたる、愛敬づきてうつくしき人ざまにぞものしたまふめる」と、やはり雲居雁は心を通じあえるいとしい妻である。

夕霧は源氏の妻妾たちで構成する六条院の華麗さを讃えながらも、ふたりの愛情を始発として築きあげた家族空間の心地良さを思うのである。子どもたちへの愛情あふれる母であり、愛らしい行動的な魅力で、夫の心をむすび続けている妻へと、思いはしだいに帰っていく。女楽の宴果て、雲居雁の待つ自邸へと「君たちを御車に乗せて」子どもたちといっしょに帰途についた、その道すがらの思考である。夕霧は身も心もしだいに雲居雁のもとに戻っていくのである。

このように、夕霧巻以前の巻々で、子どもに配慮した養

育行動をする母性的存在の母・雲居雁の姿と、貴族的美趣への憧れが家妻への愛情と危うい均衡を保っている父・夕霧の姿が叙述されていた。

三

夕霧が横笛巻で落葉宮への恋情を発露させる契機は、さびれた宮邸の寂寥感が、子どもたちでにぎやかなわが邸の雰囲気と違って心を魅かれたことにある。

わが御殿の、明け暮れ人繁くてももの騒がしく、

幼き君たちなどすだきあわてたまふにならひた

まひて、いと静かにもあはれなり。

わが邸の日常の活気と違うことが夕霧の心をとらえる。

夕霧は宮に「まほにはあらねど、うちにははしおきて」と思いをほめかして帰邸する。その夜の騒動が、場面①の乳児の夜泣きであり雲居雁の授乳行動である。

恋愛騒動も回をかさねて、最終の決着をみた時、雲居雁は里邸へと帰ってしまう。怒った雲居雁は迎えに来た夕霧に耳もかさない。この場面⑥の叙述の終わりは夕霧と幼い姫君との会話である。

「母君の御教えになかなひたまうそ。いと心愛く思ひとる方なき心あるは、いとあしきわざなり」

と、(姫君に)言ひ知らせたてまつりたまふ。

このように場面①に先立って、また場面⑥を閉じるにあ

たっても、いずれも物語本文は子どもを介在させている。いわば夕霧の恋は、子どもの影を構造的に取りこみながら発生し、收拾のつかない結末部にまで子ども幼児性を響かせつつ描かれているといえるだろう。子どもたちの背後には母・雲居雁の影が重なるのは当然である。

なお、場面①雲居雁の授乳行動の考察は拙稿(1)をご参照いただいて、以下夕霧巻における場面②、⑥を検討し、夕霧一家の子供たちの姿を、とくに母雲居雁とのかかわりを中心に考察していくことにする。

場面② 雲居雁と子供たち

夕霧は落葉宮の母御息所からの文を、雲居雁に奪われ隠される。夕霧の言い訳を信じ納得してしまう雲居雁と、自らの言い訳で自縛してしまった夕霧のいらだちをベースに、家族の一日半の日常が点描される。翌朝の子どもたちの行動から、横笛巻で夕霧が心中でつぶやいた「幼き君たちなどすだきあわてたまふ」家族の雰囲気が具体的に示される。

君達のあわて遊びあひて、離つくり拾ひ据ゑて遊びたまふ、文読み手習など、さまざまにいとあわたし、小さき児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことも思い出でたまはず。

結婚して十一年、雲居雁の子どもは最年長でも元服前の十歳である。乳幼児も含めて幼い子どもたちを家族的な雰囲気で一緒に養育している。ここには乳母や女房といった

家族以外の人物の叙述はなく、それらの人物の影が薄いことが、一層、効果的に母と子を緊密に結ぶ表現となっている。子どもたちの動きを個々に分けると次のようになる。

・あわただしくとも遊びあう子どもたち。

・雲居雁は姫君には人形を作り、あちこちに立て並べて一緒に遊んでやっている。

・少し大きい子は、漢籍の素読をしたり習字などの勉強をしている。

・子どもたちはそれぞれに自分のすることを熱中してやっている。

・もっと小さい幼児は、這い寄って雲居雁にまつわりついて着衣を引っぱり離さない。

これらは幼児保育、家庭教育の側面で考えられる。

☆年齢差のある子どもたち、年長の子が素読や習字をしているそばに年少の子どもが遊んでいる。『紫式部日記』中で「人の、童にて読みはべりし時、聞きならひつつ」と、惟規の漢籍の素読を、そばで聞いていた式部が覚えたという話を想起する。意図しない自然な家庭学習が、ここで実行されていることになる。子どもたちの家庭教育の師は、式部の父為時に倣って、父夕霧と考えたい。

☆『上代学制の研究』『幼學書』の項(4)には「蒙求・千字文・百廿詠」が貴族の家庭に於いて児童教科書として用いられた、それらが採用された理由として、元服以前の「幼童に対しても理解を問題とせず、暗誦せしめた者と思はれ

る」「貴族の家庭教育に於いては、内容的な理解を必要とせず、只世間百般の事象に關する単純な文句を、誦し易い様に韻語で連ねたものが、幼童に対する教育に用ゐられた」とある。また、「学んで厭わなかった」という工夫もされてきたとあるから雲居雁の子どもたちが、すすんで素読にはげんでいるこの場面の様子も理解することができる。

夕霧の学問初めは十二歳の元服後である。父源氏の厳命で、慈愛深い大宮のもとから引き離され、「静かなる所に籠め」て「才深き師に預け」てひたすら勉強させられたつらい経験がある。学習の苦しみと、むしろ楽しくさえある学習が対比されている。

☆藤原師輔の『九条殿遺誠』は藤原氏の子孫に対する座右訓戒の書である。この中には貴族男子の日課として行うべき事が記されている。(5)

「およそ成長りて頗る物の情を知る時は、朝に書伝（しよでん）を読み、次に手跡を学べ。その後諸々の遊戲を許す。但し鷹犬博奕は重く禁遏する所なり。元服の後いまだ官途を趁らざるの前、その為す所もまたかくの如し。」

まず書籍を読み、つづいて習字を練習し、その後それぞれ似つかわしい遊びをするように、とある。

雲居雁の子どもたちのこの日の朝の行動が「君達のあわて遊びあひて……………文読み手習いなどさまさまにいとあわたたし」であり、『遺誠』中で一日の朝の日課とすべき行

事（書伝を読み、手跡を学び、遊戯を）と一致している。藤原一門の人々にとって、この師輔の「造次にも座右に張るべし。」と割書された『遺誠』の教えは、貴族の日常心得としてつねに念頭にされていた(6)。綿密な日常生活の基準や心くばりを記した訓戒は、当時の一般貴族の心得として普遍化していたとおもわれる。物語の夕霧一家において日課としてこの訓戒をとりいれていたとしても、ごく当然なことではないだろうか。

このように、『紫式部日記』『九条殿遺誠』の内容との類似が指摘可能な、雲居雁と幼い子どもたちとの家族的なふれあいかたである。子どもたちとくに年長の子どももあり方は、種々の史書に記された家庭教育にも符合しており、雲居雁が本能としての母性感情にのみ傾斜した養育をしたのではないことは言い得るように思われる。夕霧の協力も得ているであろうし、知育の方面に配慮がなされた家庭教育が行われている。

かつて少女巻で大宮が元服後の夕霧を「なほ児のやうにのみもてなし」たため、源氏から「かしこにてはえもの習ひたまはじ」と家庭教育皆無の養育と批判された。大宮のような、ひたすらな過保護ではないと思われる。雲居雁の母親ぶりとして、その中心に雲居雁がいて子どもたちの活発な遊びや学習を見まもる、おおらかな家庭を営んでいることが想像できるのである。

。場面③ 子どもの文使い

雲居雁は疑いつつも、なお夕霧と落葉宮との間柄の事情がわかりかねている。そこで、雲居雁から物思いに沈んでいる夕霧に和歌を詠みかける。それを、子どもを使って届けさせる。

思ひ難くて、夕暮れの空をながめ入りて臥し
たまへるところに、若君して奉れたまへる、

子どもを文の使いに仕立てた雲居雁の心情は、一つには夕霧に子どもの父としての意識、家族の連帯意識を呼び起こそうとする願望がある。また一つには日常馴れあった間柄で和歌を詠みかけるという趣向の照れがあって、子どもを使うことで悪戯めかした演出をしたのだろう。冗談にまぎらわせようと装う心底は、装うだけ逆に真剣さが増幅しており、いかにも痛々しい。

これまでも、遠慮のない夫婦の言い合いをそばで見聞きしてきた子どもである。馴れあった家族の中であって、急に他人行儀な文のやりとりをする母と父とに意識の齟齬をかすかに感じたかもしれない。だが、子どもはどちらに付くこともせず、与えられた役目をただあどけなく文を運ぶのである。大人の感情の領域に立ち入らず、母とも父とも等距離に離れて行動している。

子どもを文の使いとする夫婦の和歌の贈答は、『かげろう日記』中巻、安和二年の年頭の寿歌が知られている。妻からの愛情表出という点で類似があるが、決定的な違いがあ

る。道綱母の贈歌は「三十日三十夜はわがもとに」と義妹に勧められての悪戯気分であり、兼家の返歌も呼応した冗談で返すという愛情交歓であった。雲居雁は悪戯らしくみせて、心中は鬱屈した真剣な思いであり、それだけに夕霧ははぐらかす返歌をするしかない。ふたりの間は子どもに免じた意志疎通がわずかになされるだけなのである。

場面④ 子どものいない空間

いよいよ夕霧は「心は空にあくがれ」て取りつくしまもない。場面①のように夕霧が月を眺めても、邸内は「さも苦しい。あらざりし御癖かな」とひそひそ声ばかり。また、場面②のように宮との「例の文」のやりとりを見ても、雲居雁はもう「ありしやうにも奪ひたまはず」と行動しない。互いに「うち出でたまふことなくて」と一言の会話も口にしない。場面①②と対照的な状況によって、場面④はこれまでの行動的な明るさが一転し、しめっぽく悲哀と苦悩の屈折した雰囲気となる。賑やかで活気のある一家のネガティブな側面が露顕されるのである。

ふと、ここに子どもの姿がないことに気付かされる。乳児のむずかる泣き声、母と子どもたちの日課の騒々しさ、文の使いをする子どもの姿など、それぞれの場面に姿を見せていた子どもの影が、場面④の表現からまったく姿を消してしまっている。

これまで雲居雁は子どもたちと密着して表現されていた。

夕霧が若菜下巻で「わが北の方は：子どものあつかひを暇なく次々したまえば、をかしきところもなく」と評して以来、子どもたちを養育する母親として表現されていた女性である。その雲居雁から、子どもの影を取りさった時、この場面の暗く悲嘆にくれる女性に変貌してしまう。

もともと雲居雁の魅力は、「腹あしくてももの妬みうちしたる、愛敬づきてうつくしき」と夕霧が指摘したように、自己抑制して悲嘆する姿ではなく立腹し怒る姿にあった。活発な行動性こそが雲居雁らしい愛らしさと認められていた。場面①②には率直に感情を表出する雲居雁が見られた。

この場面④には人が変わったように鬱屈して自信を喪失して気弱な雲居雁がいる。雲居雁はここでは子どもたちの母としての側面がそぎおとされて存在しており、王朝社会における一夫多妻制下の苦悩する妻の一人としての、弱々しい雲居雁の姿が示されているのである。

場面⑤ 雲居雁と子どもたち

落葉宮が帰京して、夕霧と宮は公認の仲となる。雲居雁は苦悩と心痛から食事もとれずに寝込んでしまう。翌日の昼、宮邸から六条院に寄り夕霧が帰ってくる。

日たけて、殿には渡りたまへり。入りたまふより、
若君たちすぎすぎうつくしげにて、まつはれ遊び
たまふ。女君は、帳の内に臥したまへり。

家の内に夕霧が入るとすぐに、子どもたちがなだれのよ

うにまつわりついて甘える。せきが切れたように「すぎずぎ」と夕霧にむかってむしゃぶりつく子どもたちの喜びようをみると、それまでの子どもたちの寂しさが想像される。そのような描写である。

子どもたちは、いつも自分たちの世話をしてくれる母が昨日から臥せているのを見て、子どもなりにがまんしながら寂しく落ちつかず、帳台のそばに集まっていたのだろう。父夕霧の姿にほっとし、まつわりつきながら母のことを訴えたのだろう。

父夕霧は子どもたちに迎えられた勢いで、雲居雁の臥す帳台に入り「御衣をひきやり」という行動をとる。雲居雁は怒って「いづこととおはしつるぞ。まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、同じくはなり果てなむとて」と夕霧に食ってかかる。貴族の女性らしくない憤懣をぶつけた暴言であるが、これでもかく二人の間に会話が復活したのである。

子どもたちは、たくまずして、夕霧に父である愉しさを自覚させ、臥せている雲居雁へ方向づけ、夫婦の対話開始のきっかけを与えたのである。

。場面⑥ 雲居雁と子どもたち

夕霧は宮邸に住みついてしまった。一筋の信頼をつないでいた雲居雁は、もうこれまでと子どもたちを連れて父邸へ帰ってしまう。急ぎ自邸にもどった夕霧は、そこに残さ

れた子どもたちを見つける。

「君たちもかたへはとまりたまへれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞゐておはしにける、見つけてよろこび睦れ、あるは上を恋ひたてまつりて愁へ泣きたまふを、心苦しと思す。

雲居雁は姫君たちと、目を離せない幼い男の子だけを連れて出た。生活の世話がかからない大きい子を残したのは、人聞きを気にしてとりあえず「方違え」の形を取った里帰りだからでもある。残された子どもたちは寂しくて、帰ってきた父に喜んでまつわる子があり、また、母を慕って泣きじゃくる子もある。夫婦が危機的な状況であっても、親を慕う子どもの気持が父と母とで変わることはない。夕霧は両親への愛情を激しく訴えてくる子どもたちがいじらしく心をいためる。

真木柱巻で十二三歳の姫君が、両親の愛憎のさなかにあって髭黒との別れを悲しむ心情について、伊藤守幸氏は「子供の発想とおとなの発想の決定的な差異」と指摘し「子供の悲しみさえ見えなくなっているおとなの世界」と捉えて「老いに対する痛覚的とも言うべき感覚の持ち主であった紫式部は、同時に子供の心性に対して卓抜な洞察力を示している」と論じておられる(7)。父が玉鬘への恋に狂って母との関係が険悪になったということ、父を慕う子どもの気持ちとは別という描写は、作者の子ども認識が時代社会の子ども観をはるかに超えたものであったことを理解さ

せてくれる。

日暮れてから夕霧は、致仕大臣邸に迎えに行く。雲居雁を説得する夕霧の多弁さが目立つが、いずれも子どもを楯にした論理であることに、注目したい。

Ⅱ若君たちぞ乳母に添ひておはしける。いまさら若々しの御まじらひや。かかる人をここかしこに落しおきたまひて、なぞ寝殿の御まじらひは。

夕霧は子どもたちがそれぞれの乳母と一緒にいることを批難している。「ここかしこに落しおきたまひ」の「落し」との表現からは、とんでもない母親だと雲居雁を責め憤慨する夕霧である。一般に貴族の子どもたちは乳母が養育するのが通例であり、高貴な女性は自ら子ども世話をするのを蔑視すらしている(8)。夕霧は、雲居雁もそうだが物心つく頃から母のぬくもりを知らず、乳母や女房たちに育てられてきた。乳母の養育がいかに子どもの立場に立たない制度であるかを、二人は体験をふまえて心底から承知しているのだろう。

「落し」というような言葉が夕霧の口をついて出るところに、父と母の手による育児を日頃の信条としていえることを感じさせる。事実、夕霧はその夜は雲居雁の怒りが解けないので大臣邸で泊まるのだが、子どもたちを乳母たちのそばから引きとり、「君たちを前に臥せたまひて」子どもたちのそばで添い寝をするのである。

Ⅲ今はかくくだくだしき人の数々あはれなるを、

かたみに見棄つべきにやは、と頼みきこえける。

はかなき一ふしに、かうはもてなしたまふべくや」と、いみじうあはれ恨み申したまへば、

夫婦の間を結ぶ子どもの存在は大きい。それにくらべれば細な問題―落葉宮との一件―だと夕霧は言う。こんなことのために家庭や子どもを顧みないようなふるまいをしてよいものか、と「いみじうあはれ恨み」雲居雁の帰宅をうながす。子どもを大切に思う気持ちは一時の恋愛沙汰などと比較できるものではない、といかにもさかしらに言う夕霧である。これまで子ども中心に日常に埋没し「をかしきところもなく」世話をしてきた雲居雁に、子への愛を説く夕霧の言葉はあまりにも空疎である。

夕霧は昨夜念願を果たしながら格別の喜びも感じない。色恋はこりこり、改めて家庭と子どもたちへ思いを回帰させたのだが、雲居雁は逆に出してしまった。

「何ごとも、今はと見飽きたまひにける身なれば、今、はた、なほるべきにもあらぬを、何かはとて。

あやしき人々は、思し棄てずはうれしうこそはあらめ」と聞こえたまへり。

雲居雁は居直って言う。夕霧が子どもを持ち出して情に訴えるのに対して、今さらおとなしく我慢することはない、と子の母としてではなく、夫に対する妻の立場で自己主張する。母性をたてに問題をすりかえようとする夕霧を拒否する。そのあと子どもたちをよろしく「思い棄てずはうれ

しうこそ」と付け加えるのは、雲居雁の本来母性的な性分が言わせる言葉であろうか。

IVかしこなる人々も、らうたげに恋ひきこゆめりしを、選り残したまへる、やうあらむとは見ながら、思い棄てがたきを、ともかくもてなしはべりなむ」と、おどしきこえたまへば、

夕霧は雲居雁の母性に訴えて脅す。三条邸に残された子は母に捨てられたのだからこの父が育てましょう。あの子たちはかわいそうに母を慕って泣いているよ、と雲居雁が最も気にかかることを言う。雲居雁と夕霧の築いた家庭は、「列をはなれぬ」雁の一群のように、多くの子供を誰ひとり外住みさせることなく、一族がまとまっている。三条邸に子供を残したのは、夕霧の父性を試す思いもあったのだが、夕霧の脅しの方が効き目が強かった。雲居雁は「この君たちをさへや、知らぬ所にて渡したまはん、とあやふし」と、夕霧が昨夜添い寝をした子どもたちまでも連れ出すのかと心配になってくる。どこまでも子どもたちは雲居雁のなきどころなのである。

V (姫君に)「母君の御教えになかなひたまうそ。

いと心憂く思ひとる方なき心あるは、いとあしきわざなり」と、言ひ知らせたてまつりたまふ。

夕霧は幼くて何もわからない姫君にやさしくゆっくり言い聞かせる。「母君の御教になかなひたまうそ」と、あんなわからずやの母上の言うことを聞いてはいけませんよ、

ものの道理のわからないのは悪いことなのですと話している。雲居雁の説得が手強いだけに、あどけない姫君を味方に説得する態で、無聊を慰めている。

夕霧は子どもとふれあうことで、精神的に救いを得ている。わが子にむかって「言ひ知らせたてまつりたまふ」との敬意表現は、じゃれあって遊ぶ父と子を思わせる。母に困惑させられていることをぐちる父の姿は、いつの時代にも共通する愛すべき人間の姿であり、その一家は心温かな家族集団であることを思わせる。

雲居雁と夕霧との間に子どもが介在するかぎり、家族としてまとまるかぎり、夕霧一家に救いようのない悲惨な場面展開はありえないだろう。どんな場合も子どもは双方の対立の緩衝地帯として機能している、というよりは、より積極的には、二人の間に子どもが子どもらしく居ることで、愛情修復の機能を果たすことになるのである。

四 おわりに

場面①から⑥に表現された子どもたちの諸相は、母子の心身のふれあい、日常的な家庭教育、両親のための緩衝機能など、近代以降の子どもの概念では当然と思われる子どもの姿が描写されていた。これが、王朝期の物語においてのことであるからこそ、先に伊藤氏のご指摘にもあるよう

に、そこに突出した表現意識を感じないではおれない。

源氏物語第二部の主題の深刻さの中で、違和感を感じさせるほどに人間性の自然に根ざした養育のあり方である。また、この家庭争議が、一妻を守るまめ人夕霧が、落葉宮を手にいれる長丁場において散在させた場面配置であることと考えあわせる必要もあるだろう。そしてなによりも、紫の上・光源氏のそれぞれの孤絶した救いがたいかなしみの終焉である。御法巻・幻巻の直前に置かれた夕霧巻においての設定であるということも、見落としてはならないと思う。

雲居雁と夕霧の家庭喜劇として、この場面①～⑥を解釈することを否定するものではないが、作者は笑い落とすだけのために夕霧一家を存在させたのだろうか。検討してきたように、この家族集団の子どもを中心とした、抑制することの少ない健康的な明るさは、そのたわいもない人間味のある喧騒を笑えば笑うほど、社会的重圧が個人感情をおし潰して進行している第二世界世界の、底知れぬ沈黙と暗さがいっそう濃くなっていくように思われる。

物語の読者からの揶揄や侮蔑や嘲笑をさそう対象とされることは、良くも悪くも、そのことがあまりにも当該世間の常識から隔たった状況であるということだろう。夕霧一家の様相が人間性の自然という尺度からすれば、むしろ是認されるべきあり方ではないか。貴族社会の中核にある権勢一家が、可能なかぎり人間感情に自然であろうとしたと

きになし得た選択だったのではないだろうか。そうであればこれを、作者が提示したありふれた家庭喜劇、まめ人夕霧一家の收拾のつかない家族のあり方、と解釈するのは表層の読みと言えるかもしれない。

また、子どもの存在を確かに握えたところに、おとなを中心に構築する貴族社会の遺棄された断面を、剔出するしくみがあるともとれるのではないだろうか。

(一九九三年十二月十五日稿)

注(1)「雲居雁における母性——幼い恋の発生と結婚を軸

として——」『王朝文学研究誌』第三号。平成五年三月発行。大阪教育大学古典文学研究室。

(2)秋山虔著『源氏物語』岩波新書一九六八年 一三二頁
「最大限の繁栄や幸福を、作者は深い不安と苦悩と絶望をかかえこんでいるものとして、語り描いた。第二部の世界の大きな特色であるといえよう。」

(3)青表紙本系では七人、河内本・別本系では八人。雲居雁と藤典侍の子をあわせると十二人で、他に三人の子がいることになっている。(『源氏物語事典』の「五十四帖通巻系図」による)

(4)桃裕行著。昭和十六年、目黒書店、三九三頁。実行されていた記録としては、「蒙求」は『三代実録』の天慶二年に九歳の貞保親王他が、「千字文」は『扶桑略記』の康保元年に四歳にして三好清行の子他が、「百廿詠」

は『口遊序』の天祿元年に七歳の藤原為光の子他が記されている。

(5) 『群書類從』卷四百七十五、雜部三十「遺誠并日中行事」による。原文は「凡成長頗知情物之時。朝讀書傳。次學手跡。其後許諸遊戲。但鷹犬博奕重所禁遏矣元服之後。未趁官途之前。其所為亦如此。」

(6) 『大鏡』中卷、師輔の項。村上天皇の皇后安子の「御兄をば親のやうに頼みまうさせたまひ、御弟をば子のごとくにはぐくみたまひして御心おきてぞや」(古典文学全集)の記述は、父師輔の『遺誠』の「恭兄如父。愛弟如子」をふまえたものと考えられている。

(7) 「平安文学における子どもの諸相」昭六十一年三月。『弘前大人文学部文経論叢二十一卷』所収。

(8) 『宇津保物語』仲忠の母も大宮の母(女一の宮・仲忠の妻)もいずれも子の養育をしない。一の宮には子ども世話をする仕事と蔑視した発言がある。